天のある人

二十三の物語

My Twenty Three Short Stories

池内紀

河出書房新社

二十三の物語 *My Twenty Three Short Stories*

人のある人

池内 紀（いけうちおさむ）
一九四〇年、兵庫県姫路市生まれ。東京大学大学院修了。現在、東京大学文学部助教授、ドイツ文学専攻。主な著書に、『ウィーンの世紀末』『諷刺の文学』『恋愛読本』『ことばの演芸館』『猿飛レゲンデ』『闇にひとつ炬火あり』『地球の上に朝がくる』『温泉旅日記』『ザルツブルク』など。訳書は『カフカ短篇集』ほか多数。

天のある人　二十三の物語

一九八九年四月一五日　初版印刷
一九八九年四月二五日　初版発行

著者　池内紀
装丁者　田淵裕一
発行者　清水勝
発行所　河出書房新社

〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
電話　〇三―四〇四―一二〇一 営業
〇三―四〇四―八六一一 編集
振替　東京〇―一〇八〇二

印刷　東洋印刷
製本　小高製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
定価は帯・カバーに表示しています
©1989 Printed in Japan
ISBN4-309-00560-8

目

次

天のある人　7
H氏の発明　9
M子の恋人　15
まっつぐ行こう　21
S係長の哲学　27
B神父の死　33
Y電子研究所　39
ミセス・Fの散歩道　45
エモヤン語入門　51
N病院長夫人作　57
闇の声　63
F子と神様　69

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

天のある人　75
雨　81
オドラデク　97
ノアの方舟　111
幸せはサンダルはいて　129
日曜日はサンドイッチ　131
幸せはサンダルはいて　139
偽幼年記　159
同棲時代　181
作家M氏の垂訓　215

わがK市時代の犯罪　227
はてしない物語　235
帰郷　247
あとがき　254

天のある人

二十三の物語

天のある人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

H氏の発明

なんともそぐわないシロモノだった。四方の壁は古ぼけた本ばかり。窓ぎわにおそろしく年代物のテーブルと椅子。大学の研究室は大体似たようなものだが、そんな部屋に突然、美しい夜会服があらわれたのだ。フワリと宙に浮いた。ついで器用な指先が裾からクルクル巻き上げていく。

人物もまた研究室には場違いというしかないのだった。愛嬌のある丸顔で、髪はオールバック、鼻の下にチョビ髭なんぞ生やしている。粋なダブルの背広姿で、胸元に丸い紙箱をかかえていた。舞台に出てきた手品師といったところで、実際、紙箱をかかえて現われるなり、手品師のように深々とお辞儀をした。それからまん丸な蓋をと

って――ハトならぬ女性着を取りだした。しなやかな絹、一面に波うつひだと淡い光沢をもつ。吸いこむような紫色。

名刺にはH・Hとあって、名前と同じHレース株式会社専務取締役。ところ番地は旧銅山で知られる栃木県の町。どうやら家内工業的な町工場の経営者らしかった。

「ホラ、三年前に先生、書いていたでしょう」

言われてやっと思い出した。日本橋に近い画廊にたのまれ、あるイタリア人についてエッセイを書いた。マリアーノ・フォルチュニィといって元々はスペインきっての名門の生まれ、イタリアに流れてきてヴェネチアに住みついた。十九世紀のおしまいごろの話である。「とびきり豊かな才能と素質を、彼はもっぱら工房での発明に費やした」と、そんな風に書いたことを憶えている。多才な男で、絵を描き、版画をつくり、写真を手がけ、どの分野でも人並みすぐれた腕前を示しながら絵画史にも写真史にも残っていない。フォルチュニィが手がけた舞台装置は、公演が終るとともに破棄されたし、彼の発明になる「サイクロラマ」は、抜け目のない業者によって盗まれた。

「この名前を人々の記憶にとどめさせたものは、もっとも移ろいやすいモードの分野

であり、〈デルフォイ・ローブ〉と呼ばれた女性用の衣服であった」

画廊の女あるじは、イタリアの友人が祖母よりゆずり受けた品としか言わなかった。こまやかなひだをもった、気が遠くなるほど微妙な色合いの夜会服が五着。古版画をまじえた小さな展覧会のために、私は少々レトリックを多用して風変わりな洋裁師をめぐる小文を書いた。

「日本橋に取引先の問屋がありましてね。三越の裏手です。あの日、二つ目の通りを右にまがったのが運のつきで――」

レースの商売が不振でクサクサしていたという。何の気なしに角をまがったとき、画廊の案内が目にとまった。ひと目見て背すじがふるえたそうだ。講談のセリフじゃないが、山と山とは出会わぬが人と人とは出会うもの。H氏は同じことばを二度くり返した。

「講談のセリフではありませんが、山と山とは出会わなくとも、人と人とは出会うものです。いや、もう、おどろきました」

以来三年間、商売そっちのけで研究に没頭して、やっと一着、満足できるのを作り

あげた。
「だって先生は、発明した当人が死んで以来、さっぱり作り方がわからないと書いていたじゃないですか」
「そんなことを書きましたっけ」
「書いていましたとも」
H氏はまん丸な眼をひんむいて、抗議するように唇をとがらせた。
まずは微妙な色である。草木染めを工夫して、なんとか成功した。次はプリーツ、ひだのつけ方。ひだそのものは根(こん)をつめれば出来るのだが、どうやって一面に小さな波をうたせるか。そういえばフォルチュニィの〈デルフォイ・ローブ〉には、風を受けたヴェネチアの海のような小さな波が表面を覆っていた。まったく奇怪な衣服というもので、たたむと丸まった布切れであり、老女のシワ深い顔を連想させるだけなのに、ひとたび広げられると孔雀が羽根をひろげたようにきらびやかに一変した。
「もし花にたとえるなら」と、私は気どった調子で書いたものだ。つみとられ、海にただよう花だろう。根をもたず、たえず立ちさわぐ波の中で遍歴の冒険をかさねてゆ

く。……

「先生はどこでフォルチュニィを知ったのですか？」

「さあ、どこでしたかねェ。もう随分前のことです」

なぜという理由もなく、私は曖昧にことばをにごした。十何年も前の秋の末、ヴェネチアの日暮れどき。裏手の狭い運河をまたいで小さなアーチの石橋がつづくところ。古い館や邸宅の鎧戸は永らく閉ざされたままで、扉のノブが青さびをふいている。そんな界隈で私はふと立ちどまった。季節外れの水の都は森閑と静まり返っていた。進むべきか引き返すべきか思案にくれたあげく、折衷案といった風に右にまがったとき、古雅な金文字のプレートが目についた。

〈マリアーノ・フォルチュニィ美術館〉

どこからか、かすかにフルートの音が流れてきたような気がしたものだが、むろん、錯覚だった。足元にヒタヒタと水がゆれるばかり。ノブを叩くと、どこかで重々しくドアがきしんで、かすかな足音が近づいてきた。

ひとしきり苦心談をしてから、H氏は紙箱をかかえて帰っていった。商品化の見込

みがついたら連絡するから、力をかしてもらいたいということだったが、その口の下で、何もかも手づくりの実に手間のかかる厄介な服だと言った。

「とても商品になりませんね」

それでも自分を励ますように背すじをのばしてニコッと笑った。しばらくして研究室の窓から見下ろすと、うつむき加減に歩いていくうしろ姿が見えた。図書館前の広場をつっ切り、角をまがって姿が消えた。

あれ以来、半年になるが、ついぞH氏から音信がない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.